

令和7年度 卒業後調査の結果について【抜粋版】

武蔵野大学 響学開発センター

1. 調査目的

卒業後の就職実態を把握しつつ、在学中の教育プログラムで伸長した能力、就職活動の軌跡等を調査し、今後の学修支援、キャリア支援の充実・改善を図る。特に学生の成長した背景や内定獲得の要因等を深く探るため、インタビュー調査を行う。

2. 対象

令和6年度の学部卒業生（社会人1年目）

3. 調査方法

個別インタビュー（構造化面接） Zoomにて実施（30分）

4. 調査時期

令和8年4月～6月

5. 調査結果

多様な学科・進路先の卒業生に対しメールにて連絡を取ったうち、対応可能と回答があった12名にインタビューを行った。

＜対象者＞

	卒業した学科	勤務先業種
1	環境システム学科	小売業
2	データサイエンス学科	情報通信業
3	データサイエンス学科	製造業（電子機器）
4	アントレプレナーシップ学科	情報通信業
5	アントレプレナーシップ学科	情報通信業
6	アントレプレナーシップ学科	サービス業
7	教育学科	教育・学習支援業
8	教育学科	公務（学校）
9	教育学科	教育・学習支援業
10	グローバルコミュニケーション学科	小売業
11	社会福祉学科	医療・福祉
12	政治学科	運輸業

調査報告

サマリー

インタビュー内容から、「成長要因」「進路選択・就職活動」「大学への満足度要因」「大学への要望」について、共通の意見が挙げられた。以下の通りまとめる。

成長要因	・挑戦できる環境 ・社会との接続	: 授業・ゼミ・プロジェクト等を通じて、知識を得るだけでなく、その知識を基に自ら課題を設定し、その解決に向けて挑戦した経験が成功体験となり、自信の獲得につながっている。 また、こうした挑戦を通じて、課題設定力、論理的思考力、実行力を獲得するとともに、試行錯誤の中で主体的に行動する姿勢が形成されている。また、これらの経験を通して自身の関心や適性への気づきが促され、進路の方向性の確定につながっている点も共通して見られた。 : 実習や実務家教員との関わりなど、学内外における多様な経験を通じて学修内容と社会との接点を見出したことが、高い満足度につながる傾向にある。。 また、学生間のグループワークや協働プロジェクトへの参画により、多様な価値観に触れた経験が、自身の視野の拡張をもたらし、就業後にも役立つ重要な価値観の形成に寄与している。
進路選択・就職活動	・早期からの多様な情報収集と行動 ・主体的に行動する力	: 3年生前後から本格的に就職活動を開始し、説明会やインターンシップに積極的に参加。実際の業務や企業文化に触れることで様々な業界・企業を理解したうえで進路選択を行っている。 : 進路の迷いや環境の変化、苦手分野への挑戦といった経験を経て、試行錯誤を重ねながら主体的に行動する力を獲得している点も共通して確認された。「迷い→挑戦」というプロセスを通じて、自身の価値観や判断基準が明確化し、最終的には自信を持った意思決定へとつながっている。
大学への満足度要因	・学び ・機会	: 学びたいと考えていた内容を実際に学ぶことができたこと、学修経験を通じて自身の関心や進路の方向性が明確になったことに対する満足度が高い。 : 大学から提供される多様な機会（プロジェクト、実習、留学等）を主体的に活用することで、経験を積み、成長実感につなげることができた。
大学への要望	・体験機会の継続的な提供	: 実習やプロジェクト、外部連携などの体験機会は非常に有益であり、社会との接続を強く実感できる重要な学びであるため、今後も継続・強化してほしい。また、より多様な分野や他学部との連携機会が広がることが期待されている。